



かわら版

NO. 18

多度地区小中一貫校整備事業『第2回 開校準備委員会』開催

【基本コンセプト】『つながり』ではぐくむ 「学び」と「育ち」

「開校準備委員会」では、新しい学校に通う多度の子どもたちを《9年間を見通し、どのような体制で育むことが、よりよい学びと育ちにつながるのか》ということについて協議いただいております。

国は、小中学校9年間の義務教育を一貫して実施する「義務教育学校」を新たな校種とする学校教育法の改正を2016（平成28）年度に行いました。

多度地区小中一貫校整備事業 9年間のつながりと交流を大切にした学校づくり

施設一体型

校種	義務教育学校	小中一貫型小学校・中学校
	<p>校長（1人）</p>	<p>小学校校長（1人） 中学校校長（1人）</p>
教職員組織	<p>義務教育学校長 1人</p> <p>副校長（統括教頭）1人</p> <p>教頭 2人</p> <p>教職員組織</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事務 2名 ・養護 2名 	<p>小学校校長 1人 中学校校長 1人</p> <p>小学校教頭 1人 中学校教頭 1人</p> <p>教職員組織 教職員組織</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事務 1名 ・養護 1名
学校運営	一つの教職員組織 （1人の校長のマネジメントの下で 教職員が一体的に行える。）	小・中の二つの教職員組織 （指揮系統が2つになる。）
修業年限	9年（前期6年・後期3年）	小学校6年・中学校3年

*開校準備委員会資料より

10月23日に開催した開校準備委員会では、委員の皆様には、義務教育学校について様々な意見を出し合っていたいただき、多度で開校される小中一貫校をどういった校種でスタートさせることが、子どもたちの学びと育ちにより効果的なのかを考えていただきました。

各グループの主なご意見は次のとおりです。

Aグループ

- 9年間で子どもたちを見ることは重要。新たな教育が始まるということでは期待感がある。
- 特別支援が必要な子どもたちにとっては、先生たちが替わらない環境だと力を発揮できる。義務教育学校だとその点が良い。
- 義務教育学校や4-3-2の学年段階の区切り^{注1}などについて具体的なイメージがもてないので、理解してもらえるような説明が必要。
- 教師がやりやすい形であれば、義務教育学校も選択肢の一つ。人員配置を要望する。
- 学校は地域の中心である。高齢者を含め誰もが行きやすい仕組みを整えてほしい。
- 新しい一貫校では校舎を含め環境も変わるので、全ての子どもたちが新たな学校という感覚になれる。



Bグループ

- 1つの施設に小中学生が一緒にいることによる教育の可能性は高い。
- 義務教育学校という言葉が謎に包まれている印象がある。
- 小中一貫校なのに2人の校長がいると、相談すること1つとっても、良い点とやりにくい点の両面がある。
- 1人の校長が9年間を見据えた教育を考え進めていくことはメリットがある。
- 人事異動による組織の変化等による校長2人体制のやりにくさは理解できる。
- 新しい体制についていけるか不安感をもつ教師もいる。
- 準備に時間がかかる。教職員の十分な人的配置を要望する。



Cグループ

- 4-3-2の分け方は、9年間のつながりの中で、基礎学力をしっかりとつける時期、思春期の指導を連携して行う時期、社会に出る準備をする時期と分けるようなものである。
- 義務教育学校で校長1人体制だと指揮系統が明確になる。
- 地域としては、校長が1人だと相談する際など明確だが、5地区を1人で把握するのは大変ではないか。
- 新しい学校では、基礎学力をしっかりとつけてほしい。中1ギャップ^{注2}を感じないようにしてほしい。
- 小中の区切りがなくなることで、校則等のすり合わせをしておく不安が軽減できる。
- 義務教育学校のデメリットを教えてください。



注1) 4-3-2の学年段階の区切り：義務教育9年間において指導上の重点を設けるための便宜的な区切りの1つ

注2) 中1ギャップ：小学校から中学校への進学に際し、新しい環境での学習や生活に不適應を起こす等の現象のこと

今回は、委員長の提案により、義務教育学校に勤務されている方の経験談をお聴きする機会を設けることとなりました。

なお、会議概要は桑名市ホームページにも掲載いたしますのでご覧ください。

<委員長講評>

3ヶ月ぶりの開校準備委員会でした。今回は前回提示された「義務教育学校」という校種についてあらためて議論を深めることができました。「小中一貫型小・中学校」とどう違いがあるのか、不明な点も多く慎重にならざるを得ません。疑問や不安点を話題にして情報交換することで、今後何を議論し準備すべきか少し見えてきたような気がします。学校、地域、保護者、児童生徒という立場の違いによって視点が異なることもはっきりしてきました。今回は、義務教育学校の当事者にお越しいただき、生の声を聴かせていただくことになりました。その他、子どもたちからアイデアを募る方針も示されました。判断材料を増やししながら、引き続き多様な視点で議論を深めたいと思います。



鈴木賢一委員長

桑名市ホームページ：www.city.kuwana.lg.jp

ホーム→ 市政→教育委員会→多度地区小中一貫校→開校準備委員会

専門部会からの報告

開校準備委員会内 冒頭の報告より

教育指導部会 : 9月28日開催 <多度中小学校 西山校長>

① 小中一貫教育推進協議会（教職員の組織）との連携

多度中学校区に以前よりある小中一貫教育推進協議会の6つの部会（学力向上部会・人権同和教育部会・特別支援教育部会・生活指導部会・保健安全部会・教育環境部会）と連携して協議を進め、教育指導部会が取りまとめる。

② 開校までに子どもたちをつなぐ「4小プロジェクト」

開校時一つの学校に集まった時に安心してなかまづくりができるように、つながりを作っておきたいという主旨から今年度よりスタートしたプロジェクト。

11月24日には4つの小学校の2年生が中学校の体育館に集まり、【ヴィアティン三重】の協力を得て、ボール運動で触れ合う。今後もいろいろな学年でつながりを深めていく。

③ 4小1中の事務調整

学校備品や学校集金のシステム等を開校時まで揃えていくため、調整を始めている。

④ 校種について出された意見

小中一貫型小学校・中学校から義務教育学校に変わった学校もある。義務教育学校について具体的な情報がほしい。義務教育学校になることでどんなことが期待できるのか、不安や懸念があるのは当然だが、わくわくできるような・期待できるようなことについて夢をもって探していくことも必要なのではないか。



地域連携部会 : 10月19日開催 <代表：伊藤綾子委員>



【地域のかで子どもたちをどう支えていくことができるのか】をもとに、5つの地区から通う子どもたちの通学の手段と学年の分け方について、2つのグループに分かれて地図を囲み、様々なシミュレーションをして意見を出し合った。

アドバイザーからは、「地域のことは地域の方が一番よく知っている」「安全面の見守りや学習面のサポートをしてくださる方等、地域の人材を確保していくとよい」という助言をいただいた。

A グループ

スクールバスのバス停の位置を仮置きして、人数や周辺の状況を考え、どこに集合するのが良いのかを話し合った。

その中で、「現在の5つの校区でわけのではなく、一つの校区として集合場所等を考えていくとよいのでは」という意見があった。



B グループ

安全が最優先であるという視点で話し合った。「新しくできる通学路や学校周辺の安全性をどのように確保するのか」「学年というよりは安全性や距離で通学方法を判断した方が良い」

「バスに乗る子どもは固定していないと把握できない」などという意見が出された。

